

反对語大辞典

反对語大辞典

中村一男編

東京堂出版

まえがき

私が反対語に取りつかれたのは、今からちょうど三十七年前だ。そのころ、私は、早大法学部の学生だった。最初は文学部志望で第一高等学院に入学したのだが、家人が文学部をきらったので、やむをえず転科したのだ。ところが、法学部には、反対・矛盾もしくは対照概念を示す術語が非常に多い。そこで、法律用語学習の必要上、反対語に関心を持つようになった。それに、元来が文学部志望だったから、中学のころから、日本文学に対しては特にあこがれを持っていた。古事記から明治・大正文学に至るまで、暇さえあれば読んでいた。だから、ことばに対しては、人一倍敏感だった。それとこれとがからみ合って、学生のころから、反対語に対して異常の関心を示し、反対語のメモ帳を作ったりしていた。

私は、大学を出てから、郷里で塾を開いた。塾生は、旧制の小・中学校の児童・生徒が主体だった。名古屋で開いていたころは、毎日、五百名ほどの塾生が来た。私は、それ以来ずっと、塾で国語・英語などを教えている。反対語は、私の開塾の前から、その学習の必要が教育界で叫ばれていた。そして、試験にも出題されていた。ところが、反対語についての参考書はないに等しかった。わずかに、国語の学習参考書が、百前後の、しかも、かなり誤りの多い反対語の組み合

わせを、お義理に載せているにすぎなかった。したがって、指導者の苦労もなみたいではないか。かつたろう。その実際の現われが、「机の反対は何か」とか、「ちようちんの反対は何か」とかいった奇妙な出題に見られた。

学習指導者が、児童・生徒に反対語について関心を持たせることはたいへんけっこうなことだ。けれども、こんなことでは、せっかくの反対語の利用も、学習指導上無意味になってしまう。そして、こうした事の起こるのも、反対語に関する参考書がないからである。私は、そう思いつつ、塾生教育の必要上、黙々と反対語のメモ帳を作っていた。一方において、利用度の高い反対語辞典の出版が専門学者によって行なわれることを待望しながら……。けれども、私のその期待は裏切られた。いつまで待っても、この種の辞典は出版されなかったのである。そこで、私は、実情を見るに忍びず、おこがましくも、自分で編集しようと思い立つに至ったのである。

小・中学生の学習指導なら、それまでに拾い集めた反対語だけで、どうにかまにあう。しかし、それにしても、調査・研究が浅くて狭い。まして、辞典となったら、読者層も最小限度高校生まで入れて考えなくてはならない。そうなったら、語類も今までの二倍も三倍も必要となってくる。暇仕事のようなりょうけんでは、完成がいつになるかわからない。そう考えて、私は、塾の授業以外のいっさいの時間を編集にあてることにした。毎日、十二時間以上の書齋生活である。私のあらゆる蔵書は、これに動員された。

なにしろ、国語界の未開の分野に足を踏み入れるのである。浜のまさごほどあることばの中か

らの確な反対語を搜し出すのは、なみたいいの仕事ではなかった。それに、私は、できるだけ同じ品詞のことばの中から、できるだけ広い応用範囲をもった反対語を選定したいと思った。しかも、反対語は、原則として、Aに対してはBという一対にしぼるべきだと考えた。それだけに、困難はいっそう加わった。けれども、私はこれにくじけなかった。未開の分野であるだけに、やりがいがあった。闘志も燃えた。反対語で頭がいっぱいになった。時には、一対の反対語の選定に一時間も迷い、やっと決定したこともまれではなかった。また、それだけに、私の創意による組み合わせが一つでき上がっていくたびに、言い表わしようなない喜びに胸がおどった。ちょっとした暇に、新聞を読んでいても、家人と話していても、その中に反対語を搜した。人が、反対語の鬼だと評した。

こうして、数年にわたる私の努力が実を結んで、曲がりなりにも、反対語辞典は脱稿した。私は、それを携えて上京した。そして、知人の紹介で東京堂に原稿を持ち込んだ。私も、原稿には自信があった。だから、押しの一手で行ったのである。だが、さすがに、出版を引き受けてもらえるかどうかは不安だった。東京堂で出版が認められ、共編者として文部省国語課の塩田紀和氏が紹介されたとき、私は、天にもものぼるこちがした。塩田氏は、私の原稿のすみずみまで目を通してくださった。そして、主として、見出し語の表記・標示や当用漢字・新かなづかいについてご指導を得た。

反対語辞典初版は、昭和三十二年十月出版された。さいわいに、読者の多大の支持を得て、すで

に二十版を重ねた。聞くとところによると、学生・生徒や教職員はもちろん、公私の国語研究所・大学研究室・新聞雑誌社・各種図書館でも愛用されているとか、身に余る光栄と感激している。

私は、反対語辞典刊行以来、補遺を続けてきた。その補遺語数は、日を追って増加していった。そして、反対語辞典の見出し語数に迫るくらいになった。そこで、おりにふれては、東京堂に補遺版の出版を頼んでいた。けれども、東京堂は、なかなか、それに踏み切れなかった。印刷代の値上がりによって、親版よりも高価な補遺版を出すという販売政策上の不利がそうさせたのだった。無理はないと私もあきらめていた。ところが、その後、反対語辞典を名のる、かなり無責任な出版が数社で行なわれた。そして、それらが国語界を混乱させている実情を、私は見るに忍びなくなった。そこで、また、強引に補遺版刊行を頼み込んだ。東京堂は出版部会を開いた。それによって、はからずも、補遺辞典でなく、大辞典出版が決定されたのである。昨年五月、上京してこのことを知った私は、一方では念願貫徹を喜ぶとともに、大辞典と銘うつ責任の重大さに、いささかとまどった。

帰郷すると同時に、再び、私の編集生活が始まった。編集のいっさいをだれにも手伝わせず、六十才に近い老体にむちうって、新しく手に入れた書物、一応は目を通した書物——それらに体当たりをしていった。大辞典として落ちのこないものにしていきたい、命短い身の死んで悔いがないものを残したい、二才の孫の代になっても利用度の高いものを作りたい——そう思って、仕事に熱中した。

その間、公職の会合にも事情を話して欠席した。家では、だれにも面会謝絶した。そして、朝七時には机に向かい、塾の授業担当時刻の五時二十分になるまで編集を続ける。昼食の休憩時間は十五分だ。九時十分に生徒を送り出すと、また、すぐ机に向かって十二時まで続ける。運動は、授業時間中、教室内を歩くだけ。そうした生活が十か月続いたわけだ。タフを誇る私も、さすがに、その間二回ほど病床についた。けれども、寝ていても、夢は、辞典の原稿を駆け巡った。一日がとても長く感ぜられ、寝ていられなくなって起きてしまう。そして、机に向かうと、水を得た魚のようになるのだった。

とにかく、仕事は楽しかった。全精力をこれに集中して疲れを知らなかった。こうして、でき上ったのが本書である。本書の出版によって、いささかなりとも国語界を益することができると、心の奥底から喜びが突き上げてくるのを禁じえない。

私は、右に述べたような態度と次に示すような信念で編集にあたったのであるが、老いの一徹で独断があるかもしれない。

みなさんのご教示を、せつにお願いするしだいである。

昭和四十年三月

中村 一男

編集方針と所信

以下、この辞典の編集方針と、私の反対語についての所信を述べる。

(一) いわゆる関連語の締め出し

私は、この辞典に、反対語のみならず対照語も載せた。対照語は、学習指導上はもちろん、修辞上も実用上も、反対語に劣らず利用度が高いと考えたからである。(以下、反対語に対照語を含めて、便宜上、反対語と呼ぶことにする)しかし、色盲と音痴、歌舞と音曲、ネクタイとカラーなどのような、いわゆる関連語は、全然載せなかった。こんな無価値な組み合わせで場ふさぎをしていたら、紙幅内に、必要な組み合わせが収まりきれなくなってしまうからである。

(二) 見出し語の倍增

私は、この辞典で、見出し語数を「反対語辞典」の二倍近くにふやした。古語・新語・術語・俗語など、あらゆる方面から反対語を求めてそれを載せた。また、単語、特に漢字単語の反対語を増加した。国語研究者の利用を考えたからである。したがって、見出し語に表外漢字も相当数載せた。そして、それらの選定については、特に慎重を期した。

(三) 熟語の反対語決定方針の確立

熟語の反対語については、次の方針を採った。

(1) 語義の重視

熟語を構成している単語が互いに反対語となり、しかも、熟語自体が語義の上からも反対語となるものを選んだ。たとえば、暗愚と賢明は、暗と明、愚と賢がそれぞれ反対語であり、それらで構成されている暗愚と賢明も反対語となる。また、新手と古手は、二字中の上一字、新と古が反対語であるとともに、新手と古手も反対語と

なるので、それぞれ、反対語として載せた。

けれども、たとえば、熱血と冷血、熱戦と冷戦、浅薄と深厚、文運と武運、有為と無為、有職と無職などは、この辞典に載せていない。その理由は、前記の熟語のいずれも、上の一字、または上下の二字とも互いに反対語であるが、それらの字で構成された熟語は、語義上、反対語とならないからである。紙幅がないので、ここでは、熱血と冷血だけの解説にとどめるが、某国語辞典では、熱血を「①体温の去らぬ生血。②血のわきかえるほどの熱心。」、冷血を「①体温が外気よりひややかなこと。②温情の欠けていること。」と解説している。他の国語辞典も、ほぼ同様である。そこで、熱血と冷血とは、上一字の熱と冷は反対語だけれども、それらがそれぞれ血という字と結びついて熟語を構成すると、反対語として用いられなくなるのである。他の組み合わせについては、読者の研究を希望する。

(2) 反対語一対の原則の重視

前記の方針で、熟語Aと熟語Bの組み合わせが決定した場合には、他に類似の熟語があっても、これを反対語とすべきではない。

類語は、Aに対してB・C・D・Eというように多数

あって当然である。しかし、反対語は、特に熟語の場合、Aに対してはBというように一対であることを理想とし、原則とする。Aに対してB・C・Dを反対語とするのは、的確な一対を決定しかねるような、例外的な場合に限ると信ずるからである。したがって、類語に載っている、たとえば、次のような組み合わせを、私は、反対語でないとして断定する。括弧内に示したのが、上の熟語に対する反対語である。下の熟語は、括弧内の熟語の類語ではあるが、上の熟語の反対語とはならぬ。反対語の選定は、けっして無方針であってはならないのである。

販売と購入(購買)、寡欲と強欲(多欲)、巨利と薄利(小利)、起床と臥床(就床)、富民と細民(貧民)、年始と歳末(年末)、徐歩と速歩(疾歩)、古参和新前(新参)、重厚と浮薄(軽薄)、軽症と難症(重症)、上昇と落下(下降)、玄米と精米(白米)、高貴と下卑(下賤または卑賤)、豊作と不作(凶作および平作)、低俗と典雅(高雅または高尚)

(3) 心理的・論理的必然性の追及

熟語を構成する単語が互いに反対語でない場合でも、熟語自体が互いに心理的または論理的必然性をもって対立しているものは反対語である。たとえば、栽培と自生、筆戦と舌戦、部分と全体、裁判官と検察官のたぐいであ

る。こうした場合、(2)の反対語一対の原則を貫いた。左記は、類書に散見する、誤った組み合わせの一例である。括弧内が、上の熟語に対する正しい反対語だ。

本宅と別荘(別宅)、詐取と強奪(強取)、部分と全部(全体)、自由と平等(窮屈または不自由)

(4) 反対語同一品詞の原則の重視

漢字の熟語は、

④ 名詞としてしか用いられぬもの

⑤ 「する」をつけてサ変複合動詞にもなるもの

⑥ 「だ」をつけて形容動詞にもなるもの

の三種に分類することができる。

反対語の組み合わせを作る場合、その点の考慮なしに、たとえば、「混乱」と「秩序」との組み合わせを作ると、前者はサ変複合動詞になるのに、後者はそうならぬという問題にぶつかる。

したがって、私は、

A 反対語は互いに同一品詞であることを原則とする

B 同一品詞でない場合は、特に利用価値の高いものだけを、例外的に反対語とし、それ以外は除く

という方針を採った。

この問題が起こりやすいものの一つに、非・無・不など否定の意味を表わす接頭語をつけた熟語がある。たとえば、非金属と金属(ともに前記④)、不可と可(ともに④)、無趣味と多趣味(ともに⑤)などは互いに同一品詞として用いられるが、非合理(⑤)と合理(④)、不案内(⑤)と案内(⑤)、無記名(④)と記名(⑤)などは互いに異なる品詞にも用いられる。そこで、前者を反対語とし、後者は反対語から除いた。しかし、これらの語と複合した非合理主義と合理主義、非合理的と合理的、無記名株券と記名株券、無記名債券と記名債券、無記名投票と記名投票は、互いに同一品詞としてしか用いられないので反対語とした。また、Bの場合には、見出し語の下にその点を明示することにした。

これと同じような問題が、たとえば、「戦争」(⑤)と「平和」(④)との組み合わせにも考えられる。私は、これを例外的に反対語としてあげるとともに、「戦争」がサ変複合動詞となる場合の反対語として「和睦」を組み合わせた。

(四) 中間の意味をもった反対語の増加

反対語には、中間的な意味をもったものが、かなりある。私は、それらも、この辞典に載せた。しかも、反対語辞典よりも増加した。

ある学者は、類書で、「今月」に対し「先月」または「来月」を反対語とたたづけるのはおかしいと言っている。しかし、大と小、長と短、遠と近、上と下、過去と未来などは、当然、中間的なものを予想させることばである。現に、その学者も、類書で、中を大・小の、現在を過去・未来の対照語としている。今月と先月・来月の関係は、概念の上から言って、現在と過去・未来の関係となんら異なることがない。したがって、類書での非難は、矛盾であり、非論理的だと言わねばならぬ。私は、そんなことをなんら問題とせず、確信をもって、きょうときのう・あす(あした)、今回と前回・次回、今日と明日・昨日、中旬と上旬・下旬、中称と遠称・近称、中彩色と極彩色・薄彩色など、多くの中間的なものを表わす反対語を認めて、この辞典に載せた。

(五) 種類を表わす反対語の取扱方針の確立

反対語には種類を表わす組み合わせもある。それらも、この辞典に載せた。しかし、この場合、対照が当然予想されるものに限定するとともに、考えられる種類の全部をあげた。たとえば、この辞典では、日給には週給・月給・年給を、佐官には将官・尉官をそれぞれ組み合わせた。そして、類書に見られる、たとえば、次のような組み合わせは、反対語として載せていない。括弧内が、反対語とせぬ理由である。

強震と弱震(強と弱は反対語だが、強震と弱震は、強い地震、弱い地震というように地震の程度を二分した語ではない。他に、激震・烈震・中震・軽震・微震とあり、強震は烈震の次、弱震は中震の次の程度の地震をいう。だから、強震と弱震は反対語とならぬ。)

重油と軽油(重と軽は反対語だが、重油と軽油は、比重の重い石油、比重の軽い石油というように、比重によって石油を二分した語ではない。他に、ガソリン・燈油などがある。)

大麦と小麦・白菊と黄菊(これらも、麦や菊を二分した名

称でなく、他にも、いろいろ種類がある。）

そのほか、類書に載せられている、たとえば、次のような組み合わせも、括弧内に示したものを落としているし、また、学習指導上も実用上も、反対語と認める価値のないものとして省いた。

軍団と師団（旅団）、競馬と競輪（競艇）、石造と木造（コンクリート造・レンガ造など）、社会面と政治面（経済面など）、砂どけいと日どけい（水どけい）、かわらぶきとわらぶき（スレートぶき・かやぶき・トタンぶきなど）、土橋と石橋（丸木橋・鉄橋・コンクリート橋など）、目くそと鼻くそ（耳くそ・歯くそなど）、朱ぎやとしらさや（黒さやなど）、番犬と獵犬（愛玩犬・労働犬など）、太平洋と大西洋（印度洋）

(六) えせ反対語とクイズめいた反対語の 締め出し

以上のほか、ちよつと考えると反対語かしらと思えるもので、実は反対語でないものがある。私は、それらをえせ反対語と呼ぶ。

次に、類書に掲げられているえせ反対語を例示し、括弧内に、簡単に理由を述べる。

愛妻と恐妻（愛の反対は憎であるが、憎妻という語はない。

また、恐妻は、妻を憎むことではない。自分が養子か、かいい性なしか、隠し女があるかして、妻に頭が上がらないのである。妻を憎んでいるとはかぎらない。愛している場合もありうる。）

愛国と売国（右と同様、憎国という語はない。売国は、私利をはかり国利を忘れて国を売るのが、だからといって、国を憎んでいるとはかぎらない。）

忠と孝（君に誠を尽くすのが忠、親に誠を尽くすのが孝で、昔から忠孝一本が常識とされてきた。その忠と孝を対照的に考えるのがおかしい。「忠ならんと欲すれば孝ならず」の平重盛の嘆きは、大所高所から考えたら、ありえないと信ずる。）

あいそうとぶあいそう（あいそうは人あたりがよいという語義をもっているが、「あいそうがよい」が「ぶあいそう」の反対概念で「Aはぶあいそうだが、Bはあいそうだ」とは言わない。）

古事記と日本書紀（記紀という語はあるが、これを対照語としたら源氏物語と枕草子もそうかということになる。）

ケンブリッジとオクスフォード（早稲田と慶応、東大と京大も対照語かということになってくる。）

車掌と運転手（機長とスチュアデス、船長と機関長も対照

語かということになる。）

そのほか、類書に散見する、こじつけめいた、まるでクイズのような反対語（対照語と称している）の一例をあげる。これらは、全然、利用価値の認められないものであるばかりでなく、こんな組み合わせを作ること自体が、反対語を邪道におとし入れた感さえする。括弧内に、類書がそれらを反対語とした理由を推量し、あわせて、私が、それらを反対語としない理由を簡単に述べておく。

さぎとからす（白い鳥と黒い鳥で対照したのだろう。「さぎをからす」ということわざがあつて、その場合には対照の妙が感ぜられる。けれども、それ以外の場合、「Aはさぎで、Bはからすだ」などと対照的に用いられない。したがって、他に利用の道がない。また、白い鳥はさぎにかぎらず、黒い鳥もからすにかぎらぬ。）

雑誌と新聞（月刊と日刊の対照だろうが、そうでないものもある。）

こまげたとあしだ（日より用と雨降り用の対照だろうが、ひよりげた・せうり・高げたなどもあつて、ぐあいが悪い。）戸と障子（はめるのが外か内かの対照らしいが、ガラス戸・からかみはどうなるのか。）

羽織とはかま（上半身用と下半身用のこじつけらしいが、

こうなると、はっぴともひきも登場ということになる。）

娼妓と芸妓（身売る女と芸を売る女との対照だろうが、芸妓が身を売らぬとは考えられぬ。また、芸を知らぬ芸妓もいる。）

木の葉と草の葉（木本と草本との考えの延長か。そうなると、木の実と草の実、木の花と草の花、木の根と草の根も反対語になる。）

聴診と打診（器具を使う診察と手先を使う診察の対照のつもりだろうが、医師の診察方法の、ほんの一部の対照にすぎぬ。）

桜もちとかしわもち（木の葉でくるむもちの種類か。この考え方を進めると、しょうぶ湯とゆず湯も同類となる。）ラジオとテレビ（聞くだけのものと見もするものとの対照か。講談と芝居も反対語かと言いたくなる。）

獣肉と魚肉（山さちと海さちの対照か。しかし、それぞれの一例にすぎず、また、肉の種類としても鳥肉などが落ちて

いる。）机と腰掛け・テーブルといす（筆と紙、ペンとインク、バターとパン、金庫とかぎ、金づちとくぎ、火ばちと火ばしも反対語か。）

以上のいずれの場合にも言えることだが、反対語をグイズの位置まで引き下げてしまつては、反対語の真の利用価値までが軽視されるおそれなしとしない。したがつて、私は、こうした、自分の意に満たない組み合わせは、いっさい省くことにした。けれども、必要と思われるものは、わかりきつたもので、逐一、この辞典に載せた。

(七) ことわざ・成句の増加

ことわざや成句などのうちにも、反対概念・矛盾概念・対照概念を表わす組み合わせが、かなりある。私は、そうした組み合わせを、紙幅の許す限度において、私のメモ帳から採つてこの辞典に載せた。反対語の観念を、そこまで延長して考えても、實際上、なんらさしつかえないと思うからである。しかし、その組み合わせについては、かなり、細かく神経を使った。たとえば、反対もしくは対照概念を表わすことわざが、Aに対してB・C・

Dといろいろ考えられる場合、概念表示の形式・ことわざに出てくる環境・出てくるものなどを考え合わせて組み合わせを決定した。

(八) 結 び

最後に、私は、反対語を、そのことばの用いられた時・所・人を考慮して決定したことを付言する。言い換えたら、古語には古語を、新語には新語を、共通語には共通語を、術語には術語を、改まった語には改まった語を、俗語には俗語をというぐあいに組み合わせた。

また、反対語の組み合わせで、たとえば、 $A \leftrightarrow B$ のときはおかしくないが、 $B \leftrightarrow A$ となると、どうもおかしいというようなたぐいは、いっさい除くことにした。したがつて、この辞典では、類書に見られるように、Aの見出しに $A \leftrightarrow B$ があつて、Bの見出しに $B \leftrightarrow A$ が載っていないというような場合は全然ない。

この辞典の使い方

- 1 見出し語の並べ方 見出し語は、五十音順に並べてある。そして、下の見出し語は上の見出し語の反対語である。
- 2 かなづかいと漢字 表記法は、現代かなづかいに従った。見出し語の漢字も、当用漢字音訓表の読み方に従うようにした。見出し語に当用漢字表にない漢字を用いたり、音訓表外の読み方をした漢字を用いた場合は、それぞれ、その漢字の右横に・やゝをつけて、それを示した。
- 3 語義の説明 見出し語には、簡単に説明を加えた。また、紙面の節約のため、たとえば、「間赤が」「間白が」は、見出しの順位が先になっている「間赤」のところで説明し、「間白」のところでは、余白のある場合にかぎって説明することにした。後者の説明は、紙面の関係できわめて簡略にしてある場合もあるで、わかりにくかったら、見出し順位の先の語の説明を参照していただきたい。
- 4 用言の表記 用言は、おもに口語を見出し語とした。口語見出しの動詞・形容詞については、たとえば、「うとい」「親しい」の場合、見出しの順位が後になっている「親しい」のところで、両者の文語形を示すことにした。
- 5 外来語の表記 外来語は、かたかなで示した。そして、ヴァ・ヴィ・ヴ・ヴェ・ヴォはバ・ビ・ブ・ベ・ボに統一した。また、英語から来たもの以外は、その語の下に、*ラテン語*などのように、もとの国語名を書いておいた。
- 6 ことわざ・成句などの表記 ことわざ・成句などの長いものは、紙面の節約のため見出しがなを省略したものもある。この場合、

助詞の「は」「わ」の順位、「を」は「わ」の次の順位に並べることにした。

7 いろいろの符号 左記の印が見出し語の漢字の右横についているものは

・ 当用漢字表にない漢字であることを示す。

！ 音訓表外の読み方であることを示す。

「 右の行の「以下に続くことを示す。

↓ 左記の印が見出し語の後にについているものは、

語義は、この印の下の見出し語を参照してほしいことを示す。

⊗ 口語の動詞・形容詞の文語形。

⊙ 名詞。⊙ サ変複合動詞。⊙ 形動 形容動詞。⊙ 形容詞。(以上四つの記号は、同一品詞の組み合わせができない場合に用いた。)

！ たとえば、おもいがけなく「思い」 かなの部分と同様であることを示す。また、語義の説明のところで用いた場合は、それ以下の説明が上段の相当部分と同様であることを示す。

〔 〕 かく「きやく」せん「客船」 この漢字は、「かくせん」とも「きやくせん」とも読む意。
 ほん「めい」「みよう」 「本名」 この漢字は、「ほんめい」とも「ほんみよう」とも読む意。

ㄱ ㄴ こう「ちゅう」どう「高等・中等」 「こうどう」 「ちゅうどう」 とも上段の語の反対語だの意。

ㅁ ㅂ ふくしよくㅁぶつㅁ「副食物・副食」 「ふくしよくぶつ」でも「ふくしよく」でも、上段の語の反対語となることを示す。

「または」 説明がその行で終わらないとき、前後のあきが続くことを示す。

反對語大辭典